県民と郷土を結ぶ総合博物館

青森県立郷土館だより

News from the Aomori Prefectural Museum

通巻 180 号　令和 3 年（2021）10 月 25 日　Vol.52　No.1

巡回展開催中！ ふるさとの宝物 県立郷土館コレクション

めぐり めぐって
あなたの街へ

博物館の展示といえば、各地の資料を一堂に集めてお披露目するもの。その発想を 180 度転換し、かつてそれらの資料があった場所に博物館が出向いて、その土地の資料を展示する、という企画がこの「巡回展」です。

すでに五戸町と三沢市での巡回を終え、現在は六ヶ所村で開催中です。知らなかった地域の自然や歴史を発見できたという喜びの声や、生まれ育ったふるさとへの誇りをあらたにしたという声をいただいています。また、展示や講演の内容を活用したいという地元の声も寄せられ、この企画が一過性のものではなく、将来の地域活動へと持続的に発展していくことが期待されます。

県立の総合博物館として、今後も博物館の「外」に目を向け、地域社会の問題を協働で解決していくことに繋がるような、派手ではなくても実のある展示を目指したいと考えています。

12 月には平川市へ参ります。人と地域を結ぶ巡回展「ふるさとの宝物－県立郷土館コレクション－」を是非ご観覧下さい。

※詳細は当館 HP をご覧下さい。

（学芸主査 増田 公寧）

巡回展「ふるさとの宝物」関連の記念講座を各会場で開催しました

ごのへ郷土館（五戸町）

木村秀政とヒコーキ人生

五戸町ゆかりの先人、戦後初の国産旅客機YS-11開発に関わった航空学者木村秀政（1904-1986年）は、東京帝国大学（現東京大学）大学院を経て同大学航空研究所の長距離飛行記録世界一を目指す航空機（航研機）開発プロジェクトに参加しました。同機製作現場には、むつ市出身の工藤富治もいました。そして、1937（昭和13）年、弘前市出身のパイロット藤田雄蔵の操縦で関東地方上空を周回、航続距離世界記録を達成しました。多くの優れた才能を結集し、それぞれの役割を果たしたことで生まれた世界記録。このプロジェクトは、若い秀政に大きな影響を与えました。

戦後、航空機開発研究が禁止され、秀政も職を失いますが、あきらめることなく研究を続けます。教育者としても慕われ、学生たちとともに軽飛行機や人力飛行機の開発や研究を進め、後進育成に情熱を注ぎました。

聴講者の皆さんからは、YS-11搭乗体験談を聞くことができました。また、町図書館の記念ホール、軽飛行機N-58シグネット号再現展示作業の様子も話題になりました。関係者たちの手際のよさ、技術の高さに大変驚かされたということでした。　（講師：学芸主幹 太田原 慶子）

※6月26日（土）：ごのへ郷土館を会場に開催

三沢市先人記念館

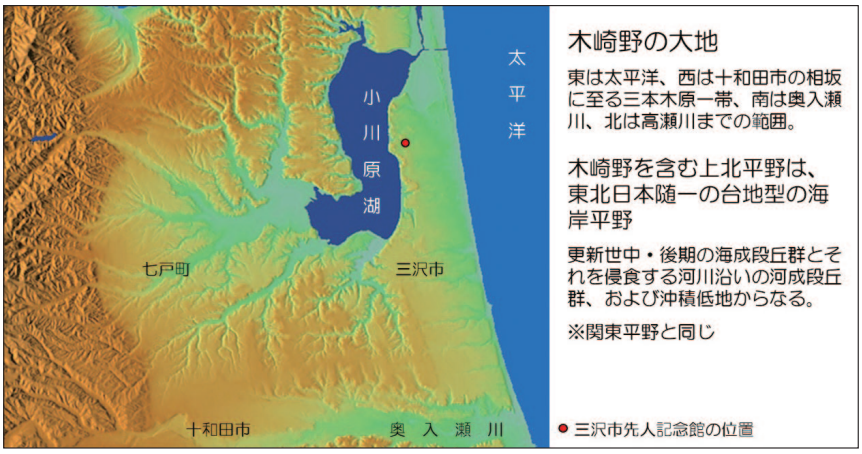
三沢の大地の成り立ちと氷河時代の動物化石

現在の岩手県北部から青森県の下北半島を含む東部地域は、古くから名馬の産地として知られていました。特に、三沢を含む木崎野牧は南部藩内では最大規模で、ほぼ上北平野の範囲に相当します。

上北平野は、海成段丘群を主とした台地型海岸平野のため、広大な平坦地が広がる一方で谷が深く、水が得にくい環境下にありました。また、十和田火山等の火山灰層に覆われて土の栄養分に乏しく、ヤマセの影響により冷涼な気候であったため稲作に適しませんでした。このような地理的環境によって畑作が中心で、馬の放牧が行われたと考えられます。

上北平野をつくる海成段丘群は、およそ30万年前から現在まで繰り返し起こった海水面変化によって形成されました。これを構成する地層からは、ナウマンゾウやヤベオオツノジカ、ニホンジカ、トラの化石が発見されており、県内にもそのような大型動物が生息していたことがわかります。　（講師：学芸課長 島口 天）

※8月7日（土）：三沢市先人記念館を会場に開催



解説資料の一つ（地図ソフト「カシミール3D」を使い作成）

当館のゲストキュレーターや学芸員が青森の自然や歴史・文化についてわかりやすく講話する土曜セミナー。今年度も青森県立図書館や県総合社会教育センターを会場に7月から始まりました。7月31日（土）に行われた講座の主な内容を紹介します。

獅子踊と大神楽

ゲストキュレーター　古川 実 氏

青森県内の各ムラには、代々継承されてきた多くの様々な民俗芸能があります。

本講座ではそのなかから、津軽地方の獅子踊と南部地方の大神楽を取り上げて、それらの芸能の特色とともに、地域の暮らしのなかにおける芸能の役割や、人々が芸能に何を求めてきたのかについて、実地調査の成果をもとに紹介されました。

それによれば、民俗芸能が活発に伝承されている地域は、地域そのものが元気であるといいます。また、現代社会の急激な変化のなかで、各民俗芸能保存会のあり方も変わってきていますが、社会変化に対応する柔軟性とともに、伝承の中核部分は守ろうという意識が見られます。さらに東日本大震災で民俗芸能は、地域復興の希望や連帯の源泉となった地域や人々の無形の宝であり、例え廃れても、再び復活できる潜在的な力を持っていることが指摘されました。

講話とともに、津軽地方の尾崎獅子踊と下北地方の奥戸の大神楽の記録映像も上映されました。聴講者の方々は、その迫力を食い入るように見つめていました。　（学芸課副課長 小山 隆秀）

※青森県立図書館を会場に開催

県立郷土館恒例のものづくり体験講座　上手にできたかな…

夏休みこどものくに

青森県総合社会教育センターが主催する「あおもり県民カレッジ夏休み子どもイベント2021」に協力する形で、8月1日（日）に行いました。

社会科の授業「縄文時代の青森の人々のくらし」とワークショップ「ミニチュア土器＆土偶作り」を行い、ワークショップには小学生20名が参加しました。実際に土器や土偶に触れるという貴重な体験をし、また、ミニチュアの土器や土偶作りでは、それぞれ工夫しながら制作し、満足のいく作品を完成させていました。

青森の達人① プリザーブドモスで作るテラリウム

様々な分野の「達人」を講師とする体験型特別講座、「青森の達人」。8月7日（土）開催の第1回目は、ハンドメイド作家の神幸代さんをお招きし、テラリウムを制作しました。

初めに、郷土館の太田学芸員が生体のコケを紹介するミニ講座を行い、その後、実際の制作へ。ガラスびんの中にプリザーブドモス（本物のコケを生体の質感のまま楽しめるように加工したもの）を敷き詰めたあと、各自選んだアーティフィシャルグリーン（造花の葉物類）や動物のフィギュアなどを神さんのアドバイスをもとに自由に配置し、可愛らしく個性的なテラリウムを完成させました。

※両講座とも青森県総合社会教育センターを会場に開催

連携展「岩木山と神々」を常盤ふるさと資料館あすかで開催しました

当館では、県内の資料館や美術館等と、各地域の特色を活かした展示会（連携展）に取り組んでいます。

今年７月２日から８月１日まで藤崎町の常盤ふるさと資料館あすかさんと「岩木山」を取り上げ、描く・祈る・お山参詣の三部で構成し、開催しました。会場入口には、岩木山観光協会さんのご協力により「お山参詣」の御幣や旗が展示され迫力ある空間を演出、近づくたびに御幣が揺れ、神々しさを際立たせていました。

岩木山信仰について記念講座も開催、信仰の対象としての歴史や資料も紹介しました。ふるさと岩木山をより身近に感じ、もっと知りたくなったというようなご意見・感想をいただきました。

学芸課副課長・民俗担当：小山隆秀による講演会（岩木山と神々）

所蔵資料紹介　野澤如洋（のざわじょよう）　波濤図屏風（はとうずびょうぶ）

野澤如洋（1865-1937年）は、青森県を代表する日本画家です。幕末の弘前に生まれ、水墨画の可能性を生涯探究し続けました。

この屏風は、2010年に当館に寄贈され、翌年に公開されました（戸倉嘉明コレクション寄贈記念　野澤如洋展）。その後、収蔵庫内で管理してきましたが、近年になって屏風裏の傷みが目立ち、表面（画）に影響を及ぼす可能性が考えられたため、修理を施しました。

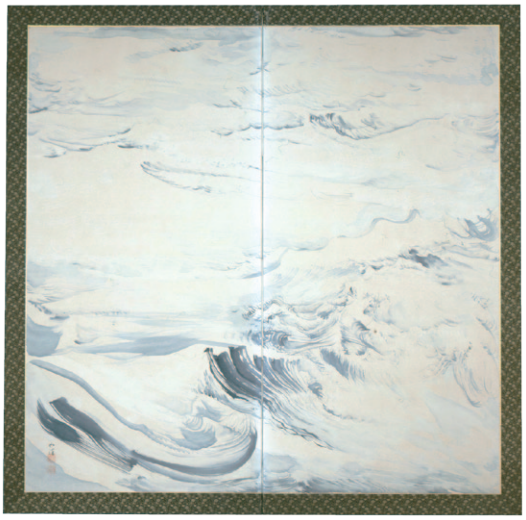
修理作業のために屏風全体を丁寧に観察したことで、画面から如洋の姿をあらためて感じることができました。画左下、うねる波の筆の勢いそのままに、縁部分に墨がはみ出していました。これは、屏風に仕立てられた状態のものに直接描いたことを示しています。描き損じが許されない状況下で、一気に描く、如洋らしい豪快な作品です。墨の濃淡、描線の強弱、大胆でありながら時に繊細な筆運びで、波を生む風までも感じさせます。

版画家棟方志功は、『板勁』（河出書房・1944年）で、次のように述べています。

…真に日本画を描き卒（お）へた画人として　唯一人の真実清溢（せいいつ）なる描法への直截（ちょくせつ）を為し得た画人として野澤如洋の画業は偉大だった。…

青森県立美術館の協力により、同館コレクション展Ⅱ（５月15日～８月31日）で、青森が生んだ偉大な芸術家二人の代表作を同時に鑑賞する機会が実現、棟方を感嘆せしめた如洋の技量とエネルギーを体感できました。

（学芸主幹 太田原 慶子）



総合博物館　青森県立郷土館だより　Vol.52　No.1　通巻180号　2021.10.25
【編集・発行】青森県立郷土館　【TEL】017－777－1585
〒030-0802　青森市本町二丁目８－14　【FAX】017－777－1588
ホームページ　ブログ